



## 中1ギャップ解消に向けた小・中連携、小・小連携

### ■ 小・中学校間の指導のズレを埋める手立て

- 「中1ギャップ」を解消するためには、小学校6年生が中学校生活の具体的なイメージを持って入学することが重要である。そのためにも、小学生及び小学校教職員に対して、中学校のきまりなどをしっかり理解してもらい、小・中学校間の生徒指導のズレを埋めていく手立てを講じていかなければならない。

- ◆ どの中学校でも実施されている「**新入生体験入学**」について、早い時期（11月）に実施したり、内容を工夫したりしている事例が多く見られるようになった。  
【例】中学校教員による授業（国語・社会・数学・理科・英語の5教科から2教科を選択）の実施、部活動の体験、清掃活動見学、合唱部・吹奏楽部の発表、生徒会役員による中学校生活についての説明、事前アンケート調査の実施と回答など
- ◆ U中学校では、中学校生活についての資料及び学習の手引きなどを小学校に配付し、小学校で指導してもらうようにしている。

### ■ 生徒指導に関する情報交換

- 新入生に関する小・中学校の情報交換については、できるだけ早い時期に、より具体的な話合いになるようにし、その上で中学校では、**十分に時間をかけて学級編制**を行い、適切に学級担任を配置することが重要である。また、担任だけでなく、管理職、生徒指導主事、養護教諭等の**各レベルでの情報交換**を行ったり、生徒指導に関する情報交換を年度末だけでなく定期的に実施したりする取組も増えている。

### ■ 教職員の交流・授業に関する交流

- 「**連携は、まず教職員の円滑な人間関係が出発点である**」という認識が重要なことから、小・中学校の教職員間の交流を深めていく必要がある。
- ◆ V教育委員会では、年度当初同じ中学校区の小・中学校の教職員全員が顔を合わせる懇談会を設定している。また、W中学校では、夏季休業中に学区の小学校教職員との合同研修会を開催し、教職員間の交流を深めている。
- ◆ X教育委員会では、小・中連携の中核をなす授業研究において、9年間継続して取り組む具体的な実践事項を設定している。中学校3年生担当教員による小学校6年生の授業参観、中学校の英語教員による小学校での外国語活動の授業実践など、授業を通じた交流も行われている。

### ■ 行事（児童生徒）の交流

- 行事の交流については、共通のめあてをもち、それを達成するために子ども同士が向き合い、協力し合うような行事の在り方を検討するとともに、コミュニケーションスキルを意図的に教育活動に組み入れて育成していくなど、ねらい等を明確にしながら取り組む必要がある。小学校の学習発表会や中学校の文化祭等への参加はもちろん、地域美化活動のボランティア活動や芋煮会等を実施し、交流の輪を広げている地区もある。

### ■ 小・小連携の推進

- 複数の小学校から中学校に入学する場合、小規模校出身の生徒が不適應を起こし不登校になる傾向が見られるため、教育委員会が主体となって**小・小連携事業**を進めている地区がある。小学生の合同宿泊学習や「先輩に学ぼう」（夏季休業中に中学生を招いての学習会）、合同外国語活動等を実施し、中学校生活への戸惑いを取り除き、好ましい人間関係づくりを援助している。